

梅園日記

卷一

芥外書房

			一八八七	和書門
			二二五七	
			一一八	
五册	架	函	號	類

73

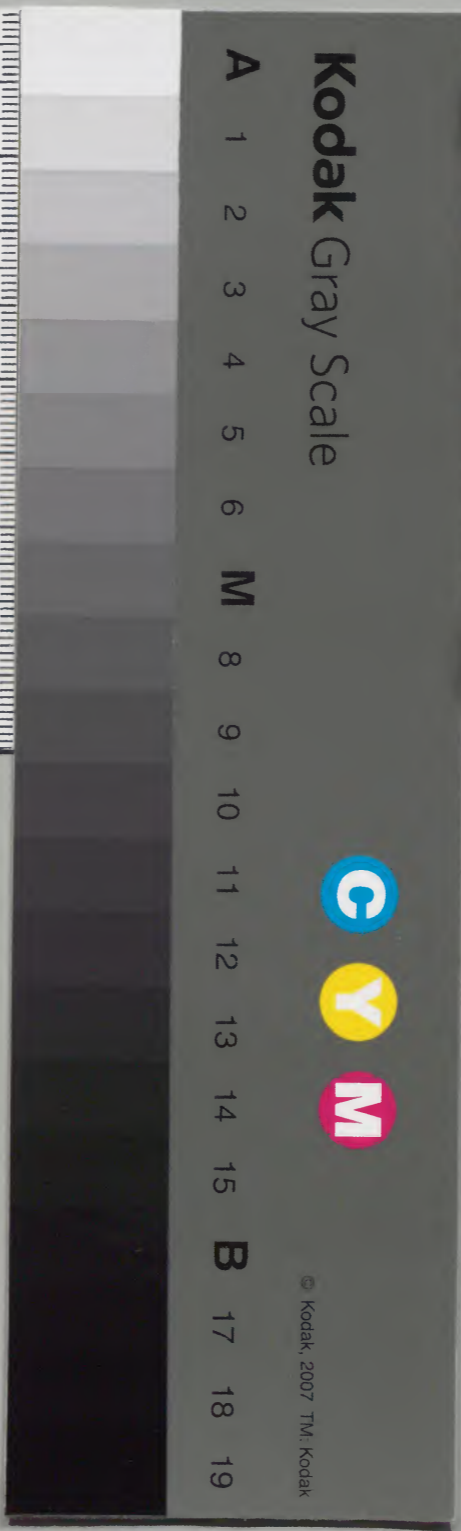
庫	文	閣	內
三三函		八八五七	和書
六架	五册	號	類

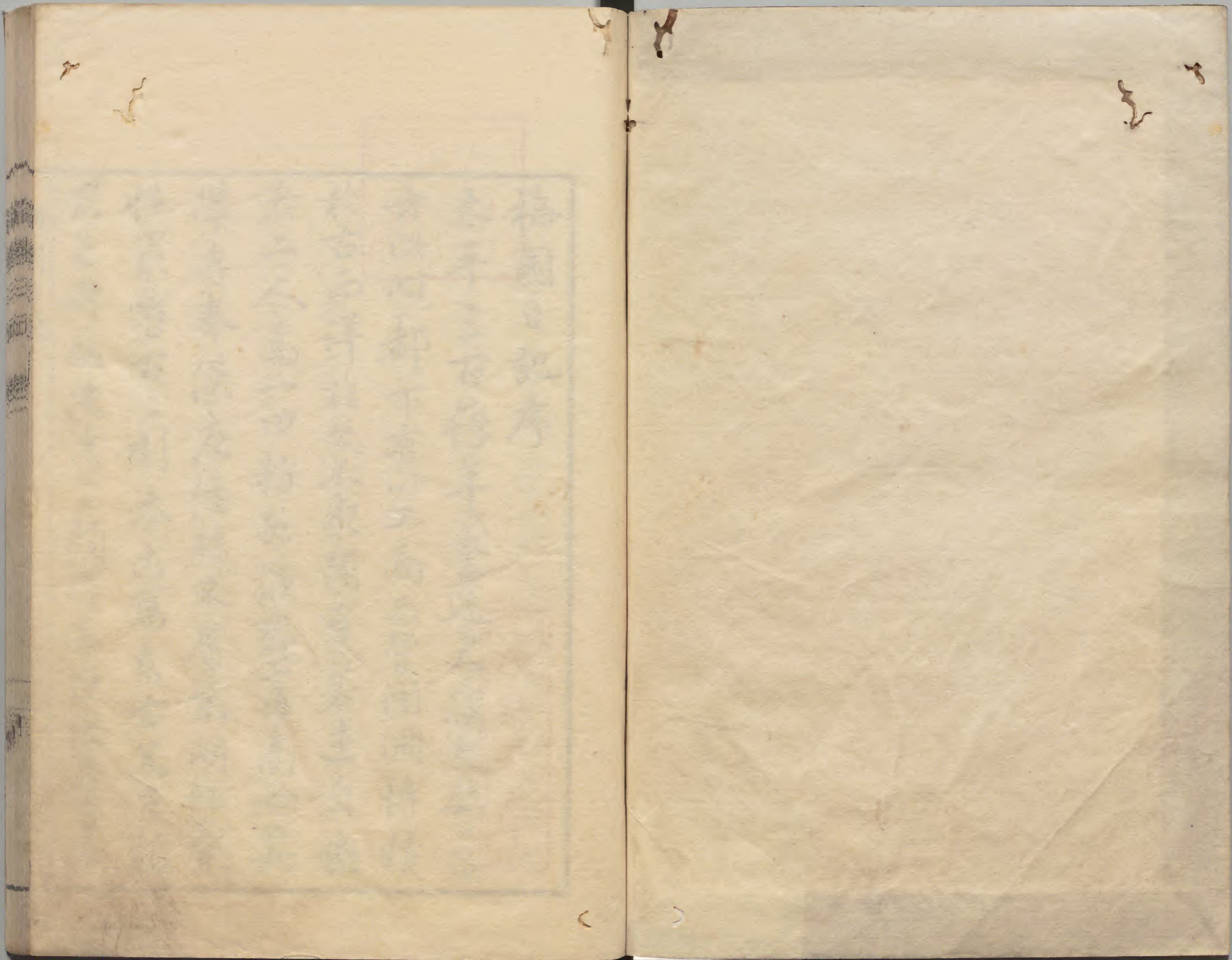
漫錄

隨筆 七十四

內閣文庫			
番號	和	18857	
冊數	5 (1)		
函號	213	73	

213-73





Faint, illegible text within a rectangular border on the left page.

梅園日記序

太平三百餘年。奎運火谷。文教日昌。

淺草文庫



於古而詳於今。不求聞達。著述自樂。精者二人焉。一曰狩谷掖齋。富高也。其學專奉漢唐任疏。不屑宋明理業。性最嗜古。刻本。古寫本。古畫古物。乃至碑版法書之類。可備採錄者。与夫

梅園日記

珍書異典。金匱之秘。名山之藏。博物君子未恒見者。廣搜而多張之。精擇而詳言之。其攷尺度。任和名鈔。考證精覈。發明極多。一曰北靜。序。負工也。其人以讀書為性命。博學洽聞。古今無遺。一物不知。引以為恥。嘗著梅園日記。五千卷。古今並舉。雅俗互陳。闡出表微。辨訛不濶。以人所未

叢。每攷一事。引證書目。殆及十數部。洋洋。儼。為反覆辯論。窮原竟委。歸於至當而後止。其詳且盡。無復剩義矣。但云皆瑣細。事必叢臆。識小而遺大。人或以是病之。靜庵則謂。吾輩小人性好讀書耳。若其說理義論政體。非分也。吾之意為。然於言。法文字字之間。正是飛。別。同異。亦風

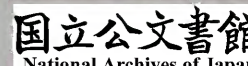
流罪過。吾不能已。故曰長之耳。飛之。不端古之。不問雅俗。凡有文字者。必無不積。必有所得。隨得隨流。每是一時。浸華。豈可與學士文人著述一例言之哉。學士文人。其分重矣。其職大矣。說理義。論政體。以資天下治教。固立也。吾輩小人。承其餘澤。樂利忘。忘。帝力於何有。以有所言。而

不過為擊壤之歌耳。是蓋遜語也。而實事也。賢者後大。不賢者識小。豈獨小而已哉。以有文武之道在焉。則小何而不識乎。若徒曰書札。忠志。是理學家之言。非篤論也。掖齋久已物故。遺書散佚。子孫不能永保。歲久憾焉。靜庵年八十。雖已老矣。精神爽。視聽無改。日夕耽讀。手不釋卷。汲

屹々。猶以著述為業。所謂梅園日記者。案頭成堆。以平生精力所存。不可不傳也。志子量主人与静庵交善。前後料理。先刻五卷。而急傳之。其餘將陸續字雕。以垂不朽。是亦獨為静廬謀不朽。而所以征歌太平德化於無疆也。甲辰十月。朝川鼎撰。

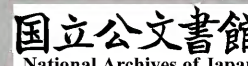
男 慶書

此の日記は、梅園日記の三巻目である。著者は、静庵（静廬）と交善し、その遺稿を整理し、先づ五巻を刊行し、残りを陸續に刊行することを志す。この日記は、著者の平生の精力を凝らしたものであり、静庵の徳化を後世に伝えるための重要な史料である。甲辰十月、朝川鼎が撰述し、男慶書が校閲したと記されている。



きしめぬふのちたれぬななりぬるいしむをむ信ま
るありふしそそきふりてぬも中下とをさうりてはや
まじしふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あぬてぬとちとけとていふちちちちちちちちちち
うちをさうりていふちちちちちちちちちちちちち
あほおれいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
まのちぬりていふ宋の代に洪邁といふ人の容齋
隨筆ふしそそきふりてぬも中下とをさうりてはや
まじしふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
めうふのちちちちちちちちちちちちちちちちちち

字をけきききききききききききききききききき
川社本石氏の玉体ふふふふふふふふふふふふふ
めきふふふふふふ顧炎武の日記録大所ふ書
新録とていふふふふふふふふふふふふふふふふ
——ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
と書この日記をいふふふふふふふふふふふふふ
けりいふふふふふふふふふふふふふふふふふ
と書書ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
人ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ぬ書ふふふふふふふふふふふふふふふふふ



是きふをのちのこゝろにまた大人よりなるや
 みろく世に老人なるものこゝろに人の心も
 いのちもものさへいふまじりかたげもあつに
 さかかゞりやうやうな名に化とあつたまは
 つまのとも五月とあつた由を後を本年に
 友ある大人のことゝもまじりかたげもあつた
 まはいふれさへもあつたまはいふれさへも
 あつたまはいふれさへもあつたまはいふれさへも

梅園日記卷第一

目錄

- | | | | |
|--------|----|------|----|
| 飯倉神明 | 一 | 茅柴 | 二 |
| 亥日 | 三 | 初雷 | 四 |
| 歌卜 | 五 | 晦日掃 | 六 |
| 大臣稱號後字 | 七 | 魚鱗鶴翼 | 八 |
| 細書為敬 | 九 | 之字 | 十 |
| 下針 | 十一 | 寄繪戀歌 | 十二 |
| 篠船 | 十三 | 柿木文字 | 十四 |
| 新婦綿帽子 | 十五 | 蜜柑盃 | 十六 |
| 覆面 | 十七 | 春晝 | 十八 |

矢立墨筆 十九

一錢切 廿一

紙馬 廿三

山女 山姫 廿五

斗 廿七

酒筵 廿九

鷺足 卅一

義茶亭 卅三

瘡 卅五

武字をとりと訓む 卅七

朝あけ 二十

紙燭かなまりの歌 廿二

挾將棊 飛將棊 廿四

見しとよみし歌 廿六

忌穢 廿八

燕巢 三十

燕戯 卅二

さし櫛 卅四

刀玉 卅六

梅園日記卷第一

梅園日記卷第一 江戸北慎言著

三田飯倉神明

吾妻鏡壽永三年五月三日記。被奉寄附兩村於二所大神

宮内宮御分武藏國飯倉御厨外宮御分安房國東條御厨又

神鳳抄二所大神宮の御領地と記しる書小武藏國飯倉御厨當時四貫文と見えたる飯

倉御厨長日御幣五十町とあれを此國は飯倉といふ地名二所あり

なる所今この江戸乃三田なる神明の地あるべし其證下は武藏鑑に兒玉郡小飯倉あり是より

は止件の安房國あり朝夷郡の東條也今も神明社ありと

きけり吾妻鏡又文治二年七月廿八日記。新日吉領武藏

梅園日記 卷一

國河肥庄と云り。今川越の養壽院也。文應元年の。新日吉山
 王の古鐘あり。三芳野名勝圖會川越の地志也。養壽院の條也。寺記を
 引く。往古此所。新日吉山王社頭也。とあり。吾妻鏡。又兼久三
 年八月七日。記也。鶴岡八幡宮御分。武藏矢古宇郷司職五十餘町
 云り。今當國足立郡。谷古宇村也。八幡宮ありて。此時の古文書
 を藏キヨ。其文小。可令早為クハラ。鶴岳八幡宮社領。武藏國矢古
 宇郷事。右以當郷可為社領之狀。依仰下知如件。兼久三年八
 月三日。陸奥守平花。望海每談也。芝神明宮。もとハ
 三田を飯倉の舊地あり。といふ。望海每談也。芝神明宮。もとハ
 新堀の南北方。有馬中務大輔殿の屋舖乃後長屋ウレロと添く。神
 明の宮あり。是古乃宮所也。江戸草創此と云ゆ。上方よりの往

玉葉建曆二年三月廿二日宣旨。知行之
 董屢。祝未社於神領之中。と云をも考ふし。

還の地少く。當所賑やうあまは。是へ出た。今小繁昌の地あり。古宮
 乃跡もまうり。又新編江戸志也。小山神明社。窪三田飯倉
 神明の舊地を。山上に社あり。など云り。又此あつた。飯倉町
 六町。其餘飯倉某町。と唱ふる所多く有と考へ。今三田と飯倉町
 との間。新堀といふ川あれども。昔ハあつたり。昔物語ハ
 昔ハ芝新堀無之。元祿之比。被仰付候と見たり。

附識。毎年九月。此神明祭也。參詣此人。必生姜を買ふ事
 あり。山中稠有の。芝神明宮開始縁起石塚豊
 芥所藏に。生姜を此神
 へ奉る事ハ。昔社を造立せし。飯倉山の。近邊皆赤土也。赤土ハ
 種を殖ぶとも。生姜おひ出る物あり。自然に出来たる物あり。
 取あむ神奉りし。例なる事也。又大石千引の。野乃舎

隨筆に神明祭に生薑を齋事ハ論語鄉黨篇小不撤薑食とある注に薑通神明去穢惡故不撤とありこれより誤るゝとある人ありあどあり按とるゝとある人の説うけがさし皇太神宮年中行事に四月十四日遠江神戶所進種薑子良宿館南垣内所奉殖也九月御祭之時御饌所供進也とありく伊勢の神宮にて九月の御饌に奉りてをそのくゝにうゝる遺風あるべし

茅柴ニ

葛原詩話前編云俗ニ村店ノ薄酒ヲ鬼コロシト云即村店壓茅柴ト云是ナリ又茅柴酒トモ云ベシ韓子蒼詩アリ飲慣茅柴語苦硬不知如蜜有香醪ト堅瓠集ニ茅柴ノ胸ニコダワリテ下リ難キヲ惡

酒ニ喩フトナリ又後編云茅柴前編ニ解ス然ルニ事物紺珠ニ茅柴言如茅柴燄易過薄酒也此解甚佳ナリ東坡詩幾思壓茅柴禁網日夜急按する小事物紺珠を明の萬曆十三年乙酉黃一正が撰なりこれより百四十餘年さき皇朝文安甲子の序ある下學集に茆柴濁醪也一醉而即醒如燒茆柴火便滅とありさる古く唐土の説ある處くおひひ小果して宋人乃錦綉萬花谷前集に韓子蒼詩云謂苦硬之酒如茅柴火易過とありさるて葛原茅柴と壓茅柴を同物とせしと誤なり施注蘓詩云茅柴乃村落所釀酒也又黃州人造私酒俗謂之壓茅柴と見えして壓茅柴ハ隱一造也

附識ハ陔餘叢考云酒之劣者俗謂之茅柴酒東坡詩幾思

壓茅柴。蘓叔黨詩。茅柴一杯酒。然曰。壓茅柴。蓋酒之新釀。用茅柴壓而醉之耳。といふも。葛原の誤。同。解も亦壓字。小因くの臆説あり。茅柴を壓倒する意あり。壓茅柴と名付しあるべし。

亥日

無題詩。藤原周光の賦。漁父詩。卯時要飲。江村霧。亥日成。群。沙岸風とあり。亥日のるハ。韻語陽秋。元微之。適通州。白樂天有詩云。寅年籬下多逢虎。亥日沙頭始賣魚。後又有東南行云。亥日饒鰕蟹。寅年足虎。張籍云。江村亥日長為市。と見えし。白氏張氏の詩語によりたる。諸書を讀く其説を得。能改齋。

按武寧十縣以下。寧州之武寧縣。常州之武寧縣。市也。九。字今據。太平寰宇記。卷。百六。訂。正本。原。據。補。鴻泥日録。嘉慶七年二月。十四日。及至。龍場。龍場。故。名。狗。場。居。人。諱。之。三。四。年。來。易。今。名。大。書。揭。市。門。然。行。人。呼。狗。場。如。故。三。月。初。三。日。至。三。月。初。三。日。猪。場。河。際。俗。以。

漫録。卷七。豫章古漁父詩云。魚收。亥日。妻到市。見李淳風易鏡占。漁獵勝負篇云。取魚卦宜。二水。又云。取魚宜見水忌土。蓋亥子屬水。乃知魚收。亥日。所自。文苑英華辨證。卷九。分寧縣。武寧縣。本當州之亥市也。嶺南村落有市。謂之虛。不常會。多虛日。西蜀曰。疾如。疾疾間而復作也。江南曰。亥。本與蜀同。惡以疾稱。止曰。亥耳。合璧事類別集。卷十。荆吳俗。有取。寅申巳亥。日。集于市。故謂。亥市。徐筠脩。志。なとあるを考之。ちあまよひ。ハ雲。抄云。たつ。の市。辰日。也。按。さる。よ。も。此類あり。焦氏說。桔。五。云。滇人以辰日。為市。號曰龍街。明詩綜。卷七。施武街子。詞云。猪。街。纔。罷。又。龍街。注云。滇中以作市。曰街子。逢辰亥戌未。日。為期。堅瓠丁集。卷三。云南中諸夷。每以丑卯酉。日。為市。故曰牛場。兎場。

支辰名場此地
以文日市遂呼
猪場與龍狗場
例同
又海錄碎事云
池州聚落至有
期日虛集處謂
之子午會

雜言 卷一

雞場云とあり。似るるなり。

初雷 四

日次紀事云。凡一春之中。雷始發聲。是謂初雷。京俗節分之夜。貯置所。撤家内之熬豆。聞初雷時。則三粒食之。寒夜筆談云。世ノ人初雷ノ鳴時。節分ノ豆ヲクフ。鵝冠子ニ。夫耳之主聰。兩豆塞耳。不聞雷霆。ト此語ヲツタヘ誤名也。按るるに。玉燭寶典。卷十。荆楚記云。家家留宿歲飯。至新年十二日。則棄街衢。以為去故納新除負取富。又留此飯。須發蟄雷鳴。擲之屋扉。令雷聲遠也。太平御覽八百五十小時鏡新書を引て發を驚よ作り扉をよ作まるとあり。とあり。これより出るるなり。

歌 卜五

婦女子無心少く。百人一首此草紙をひき。其歌をむら

なふを歌とといふ。あろろ。あも似るるわさあり。卷十といひ。聊

齋志異白秋練條云。女一夜早起挑燈。忽開卷。悽然淚瑩。生急起問之。

女曰。阿翁行且至。我兩人事。妾適以卷上展之。得李益江南曲。

詞意非祥。生慰解之。曰。首句嫁得瞿塘賈。即已大吉。何不祥之

與有。女乃稍懽。又婦女子筭を投きたる筭といふを。是も

とろろに。其さぬと志とねども。釵上といふ。浩然齋雅談云。

鄧林號謙谷。臨川人。嘗客孟氏。塾戲降紫姑。得詩云。隔溪雲薄。

雨飄蕭。欲采荷花。不見橋。釵上無憑。芳信杳。酸風空度鳳臺簫。

晦日掃 六

今の世は晦日掃とて。毎月の晦日。家内を掃除するものあり。是は久しきあり也。延喜民部式。左右兵衛式。並云。毎月

晦日掃

晦日令諸司仕丁掃除宮中。大内家壁書云。從築山社頭至松原同小川掃除之事。可為每月晦日也。あど云り。ともこい。あも初らるるあり。荆楚歲時記廣秘笈本云。正月晦日送窮。注云。金谷園記云。高陽氏子瘦約。好衣敝。食糜。人作新衣與之。即裂破。以火燒穿著之。宮中號曰窮子。正月晦日巷死。今人作糜棄破衣。是日記于巷曰送窮鬼。猗覺寮雜記云。唐人以正月下旬送窮。韓退之有文。姚合有詩云。萬戶千門看無人。不送窮。海錄碎事云。池陽風俗。以正月二十九日為窮九。掃除屋室。塵穢投之水中。謂之送窮。あどあるをえく。唐土あくも。正月晦日掃除するを志るべし。又十二月の煤掃も。もとハ晦日あり。よ。俊頼朝臣の散木集云。こい乃暮北歌とてよめる。残るひするむる

の中まれことあひよそのなりはてん程を。る哉。顯昭注云。あひひさるるとは權サレとせけ。掃除とるる也。むろのや。あとは竈戸をいふと。古髓コヅイ腦ノウよあり。除夜小民の竈戸をささひく。あんどる年のうち此の吉凶をふもとい。火を日くにあて。きえんきえぬをえく。あどあもをほる。ことあひと。えんと思ふを云也。それよ。我身のありはてんほどをもあると讀也。祇園修行日記云。貞和六年十二月廿九日。今日晦日也。始煤掃。宣胤卿記云。永正元年十二月十九日。朝陰屬晴。比屋煤掃。亂以前晦日。式日也。嚴嶋道芝記年中行事云。十二月晦日。御煤掃。上番比社司。衣冠引繕ひ。國文代。下番等。立す。り。御殿を清めなる也。あど草根集云。歲暮家くよとくひつづく

をわやくにやいすけてたつる雪か。とよめるも除日ちる
べし。是も亦とろり小あり。玉燭寶典卷十云。歲暮今世多解除。
擲去破弊器物名爲送窮。太平御覽四百七云。錄異傳曰。昔廬陵
邑子甌明者。從客賈道經彭澤湖。每輒以舟中所有多少投湖
中。云。以爲禮。積數年後。過見湖中有大道。有數吏乘車來候。云。
是青洪君。以君前後有禮。故要君。必有重送。君者皆勿收。獨求
如願爾。去果以緜帛送。明辭之。乃求如願。神呼如願。使隨去。如
願者青洪婢也。明將如願歸。所欲輒得之。數年大成富人。歲朝
鷄一鳴呼如願。如願不起。明大怒。欲捶之。如願乃走。明逐之。於
糞上。糞上有昨日故歲掃除聚薪。明乃以杖捶使出。久無出者。
因曰。汝但使我富。不復捶汝。今世人。歲朝鷄鳴時。轉往捶糞。云。

按本原誤而
要今人據
詩略改正

使人富也。こい歳朝。昨日故歲掃除とあり。除日に掃除したる
りめらる也。夢梁錄云。十二月盡。俗云。月窮。歲盡之日。謂之除夜。
士庶家。不論大小。家俱洒掃。門閭去塵穢。淨庭戶。僧明本の
中峯廣錄。鴈蕩除夜。頌云。茅屋三間冷似水。灰頭土面十餘僧。
掃除自己閑。枝葉不打諸方爛。葛藤就手揭。開新歲曆。和光吹
滅舊年燈。頂門別具摩醯眼。越死超生似不曾。揚循吉。除夜
雜詠云。除塵舊室攻。遂安縣志云。除夜掃宅會。南野堂筆
記云。梅里薛鹵齋廷文。五十味。要有除夕詩云。獨送窮愁獨掃
塵。一回除夕一傷神。來朝記取年多少。不敢分明說與人。とな
除日の煤掃あり。

大臣稱號後字七

樋口殿記云。臣下ニ後トヨムハ。後京極。後德大寺。後成恩寺。バカリ也。有職玉の枝云。後といふは天子の號計みくは式。答其通りよてい。猶もども後德大寺。後京極。是ハ古よりごとよみ來る。其通りよて不苦い。其外ハ後と讀く。るごとよくい。後成恩寺殿などよみ中い。関秘録。後京極。後德大寺ハ音。後と唱ふ。是ハ其人品徳義を賞美とる。按するに。常昭愚草。伊勢貞云。帝皇を。後鳥羽院など中。攝家を。後成恩寺殿などノチと中。也。年山紀聞云。和長卿日記云。凡儒中ノ故實者。天子之追号。後字用音讀。大臣稱号之時。後字用訓讀。是通法之故實也。又大臣稱号之内。後京極殿之一号。人皆後字用音。是無殊事。只以言好之義也。故自由之讀也。何後乃京極殿。可申事。有其煩哉。玉るま。愚管抄。後の京極殿と。

の字をそへ書り。こは後の京極と。證也。とあり。和長卿の御説乃証とす。はて實定公をも。後の德大寺殿と申べし也。其證ハ。隆信朝臣集の詞。おちの德大寺乃左大臣大納言と申。了。附云。肖柏九代抄。新古今の條。とあり。又續世繼の卷。おちの二條殿の西子。と云。と云。す。のちとよほん。論。又帝王乃所追号をも。おちの某と申なり。今昔物語集卷十二。第一條。後ノ一條院ノ御代。筑波問答。此御所。あり。は。後の鳥羽院乃。時。よく。足。傳。也。増鏡の卷。2。後の堀川院乃。女。て。神仙門院と聞え。草根集詞。永享元年十月三日。右馬頭家。よて。人。六首の題を。て。後の小松院へ。は。詞を。歌合の中。など。ある。あり。

らうなり。又袋草紙に先ノ朱雀院ノ御時とあるを。後の朱雀院と申ならむる亦論あり。

魚鱗鶴翼

寒夜筆談云。魚鱗鶴翼ノ陣ト云ハ魚麗鶴列ヲ誤タルナリ。酉陽雜俎ニ王固ト云モノ。竹筒ヨリ蠅虎子ハトリクモ數十ヲ出スニ行ヲ分ツテ二隊トナリ。對陣ノ勢ヲナシ。鼓ヲウツタビニ陣ヲ變ジ。天衝地軸魚麗鶴列。備ハラザルナシト云エ。又文苑英華ニ。獨孤及ガ風后ハ陣圖記ニ。彼魏之鶴列。鄭之魚麗トアリ。按スルニ魚麗ハ左傳。鶴列ハ莊子ニ出タリ。燃犀錄云。鈐錄ニ云。和軍ニ魚鱗ノ備ト云ハ車輪陣ヲ古ノ博士ガギヨリシト。讀傳ヘタルヨリ。魚字ヲ付替タルカ。又魚虎陣ヲ誤リタルナリ。鶴翼ハ虎翼陣ノ唱誤ナリ。按スル

ニ。唐太宗帝範序曰。夕對魚麗之陣。朝望鶴翼之圍。ト云。魚麗鶴翼ハ古ノ陣ノ名ニシテ。誤ニ非ズ。且魚鱗ハ魚麗ノ訛轉ナル明ナリ。慎言按ずるに。文苑英華七百三十五ニ載ル帝範序も亦魚麗ト作ス。さうぢも魚鱗陣ノ文字。漢書陳湯傳小出ス。魚鱗ノ字。是るゆめと思ひ多し。果して清ノ武英殿本ノ帝範序ハ。魚鱗ト云。魚鱗鶴翼皆陣兵之形勢也。ト云えり。

細書為敬

秉穗錄二編云。通鑑綱目。宋高宗紀。馬進以テ大書牒。索戰。張俊以テ細書狀。報之。進以テ俊為怯。是ハ考をば。細字に去を敬とする也。按ずるに。これより考なり。周必大ハ玉堂雜紀ニ。

安南國王表章字如蠅頭幾不可辨玉音每嘉其恭順とある
よていよくあきくうなりまも明の王佐が灼艾集の禮部胡尚
書澹嘗云太宗命予使外瀕行論曰人言東宮所行多失當南
京可多留數日試觀如何密奏來奏疏書字須大晚至我即欲
觀云清の余金が熙朝新語の邵陽張大有為漕運總督奏
言寫字手顛請奏摺代書上諭云忙時令人代書亦可若密摺
仍須親寫即字畫粗大略帶行草亦屬無妨辭達而已敬不在
此我朝待大臣之寬容脫略如此たあるを足れば明清に至
てもあな此定ありて史記匈奴傳の漢遣單于書牘以尺
一寸辭曰中行説令單于遣漢書以尺二寸牘及印封皆令
廣大長倨傲其辭曰云と足えれば出札細小を教へ粗大

あるを不敬とほる漢土のくもくも昔も 皇朝までも昔も
此定なりき法然上人繪詞一僧正又重なる伏云一紙の趣
深く肝は銘し一代の聖教を載らるといふことこれおぼへば
ゆれ愚妄の所存秋毫も違をばゆる信仰無極の抑彼へ進上の
書札細少を為先文字も今少ちひさた中には書寫あせて
強べくは自學上流の爲に宜なる趣さる中ゆ也とあり
按は僧正と兼

之字十

過庭紀談云凡扁額墓碑ノ類ノ題署ニ篆隸八分正楷ナドニ書
ハ多ハ之字ヲ入テ書タトヘバ朱雀之門白馬之寺ナドノ類也草
書行書ニテ書ハ之字ヲイレヌモノ也是ニ付テラカシキ話アリ明

錢易が南部新書已^十卷小出て新書の文客中同集よみ四字多きもの唐時のものなり。
宋本太平御覽百八十三に韋述が西京新記曰春明門有蕭望之冢。
宋敏求が長安志に唐外郭城東面三門中曰春明門注に
當門外有漢太子太傅蕭望之墓と見えたり。韋述ハ唐人。錢
易宋敏求と俱に北宋の人なり。明の時あつぬものなり也。

下針十一

古今著聞集弓箭篇云。頼光朝臣の郎等季武第一にききりてさ
げたるや。或はとれは射なり。京師本保元物語云。為朝ハ
空ヲ翔ル翼。地ヲ走ル獸。サゲ針ヲモハヅスト云事ナシ。又云。惟
行。弓ハ三人張。矢束ハ十三束。サゲ針ヲモ射ント思フ者ナリ
ケルガ。源平盛衰記云。金剛左衛門ハ下針ヲモ射上手也ケ

レハ異名ニハ養由左衛門共云。按するに。ちろくちろくちろくも。針
を射多るものなり。北史魏宣武靈皇后胡氏傳云。幸西林園法
流堂。命侍臣射不能者罰之。又自射針孔中之。大悦。賜左右布
帛有差。五代史唐莊宗紀云。射獵或掛針於木。或立馬鞭百
步射之。輒中。なると見えたり。

寄繪戀歌十二

六百番歌合寄繪戀顯昭。以てこれとむひやとくぬ思ひをば合
う。よどわかきうの。はる。陳云。長康隣女を艶して。繪よわかき
多るものなり。これハ太平廣記引名畫記云。晉顧愷之字長康
嘗悦一隣女。乃畫女於壁。當心釘之。女患心痛。告長康。遂拔釘
乃愈とあり。太平廣記ハ宋の太平興國三年よりてきりれど世ハ行

此は明の嘉靖年中に梓行して世に傳へしものなり。其の初めは
 後柏原院の所宇にあつて、顯昭の以よりの數百年の後あるに
 名畫記など傳へりてありしや。此師の博覽あるべしと隣女
 晤言に及んたり。按するに、此書の名は多し。開卷に此事
 をあるに及んたり。按するに、此書の名は多し。開卷に此事
 記せしは、此の誤りなり。此の誤り多し。廣
 國間、太平廣記、鏤板頒行言者、以廣記非後學所急收、板藏太
 清樓、於是廣記之傳鮮矣。とあり。かく板も彫り頒行せしむ
 板を藏し、それば傳へることをすくなくせしむ。たえてなりといふ
 非也。されど宋人の書中に、此書を引くるもの、慎言がたえしむ
 も三十種あり。其の初め、遂初堂書目、京本太平廣記と

又、京本なりぬものあり。其の初め、遂初堂書目、京本太平廣記と
 証と、萬葉集仙覺注、異制庭訓、醫家千字文、注、佛牙舍利記、
 日件録、曉風集、四河入海、帳中香、梅花無盡藏、湯山千句、注、水
 引、つるみ、初、是、一、乃、誤、なり。又、明の嘉靖年中、
 た、少、て、は、後、柏、原、院、の、所、宇、に、云、く、按、す、廣、記、梓、行、ハ、嘉、靖、丙、寅、な
 り。丙寅ハ嘉靖四十五年なり。皇朝正親町院乃永祿九年
 たりば、後柏原院崩御の大永六年丙戌よりハ四十一年
 後あり。是二りの誤也。また、名畫記全部十卷ハ、王氏畫苑、津
 逮秘書等、に収てあり。學津討原も、取れども、隣女晤言より、後の新渡あり。それをあぐ、廣記に
 ありしもの、三りの誤なり。また、晉書文苑傳に、顧愷之字長
 康、嘗悦一鄰女、挑之、弗從、乃圖其形於壁、以棘針釘其心、女遂

患心痛愷之因致其情女從之遂密去針而愈とあり。顯昭の歌ハオノとよまれと。いとなれての五文字ハ挑之弗後の文よてよみ一也。さるを名画記を引くと。四川の誤あり。

附識と範兼童蒙抄小別とゆく君姿を繪少書て胸乃あるを成さしやと免ま。古歌也昔人女の遠き國へまうり小なる成恋とひてよある也。是ハ幽明録と云書小。顧長康と云人ひとり女の女にあり。女家小ある事程ふ。恋思ふゆゆあさ。すかち女の形を絵少書て其胸の程にむごをさして壁小さ。つ女ゆく十里をりして。忽小胸のつくれ事さす。如く又ゆ事あさ。いびと。いる心也。とあり。是ハ上の故事の異説なり。

篠船 十三

今とてふ子のもて遊ひ小竹葉少て船を作りて。さ舟と云此物古く有り。

夫木抄云源仲正うなの子が流れ小う。竹葉の泊り。冬の氷あり。り

伯耆卷云夜に入。弥風強く吹多れば。船も危くといふるべし。こと不覺主上忠顯を被召。竹の葉やあると。尋有れば。船中よ可有様を。りり。れども。可尋由を勅答やて。前を立給。かり。る所よ。不思議や。苦の下に竹の葉一枚あり。是を取。り。り。り。此竹の葉を被召。手自船を三ツ造つて。守より。舍利を三粒取出さる。此篠船よ一粒づ入さる。後て。海上に浮べさせ。祈念を。程海上静りぬ。詞林采葉抄云。一天下ノ神無月ヲバ。出雲國ニ神在月トモ。神月トモ申也。我朝ノ諸神參集給故也。其神在ノ浦ニ神來臨ノ時。少童ノ作ル如クナル篠舟。波上ニ浮事。不可及算數。

結句故
事出太
平廣記

巡杖記云越中五ヶ山といふ一より神樂をどりこきりこ
唄とて、こきりこのありこきりここきりこ。石ひとゑと笹舟の
せりや、石ひとゑこきりこでゑいふく。按するふ。唐土も此をれ
あや。江湖後集に陳必復戲折竹葉為舟示奚奴詩あり。乃翁
兒戲可憐生折葉浮舟趁岸行有便信風翻覆易無心逐水去
留輕觸崖頗似乘時意藏壑浮閑遯世情幸喜此身元不繫底
須壁上覓囊瀛んこうとんえこきりこ。

栢木文字 十四

白石先生の記よ。かこみ一尺餘もあつらん木の半よりさけ
所よ。母のいふら天下の字もを人乃見せこきりこ。是ハ栢木こきりこと
いひらばかの人驚きていふこきりこ。あひぬらん。是ハあるある。淡

栢を切る。薪よせんとして割る。此文字のあははこきりこ。免て
あき物なりとて。薪ふせぐ京より来り也といふ。栢木こきりこ
あはらふこきりこを。あはらふこきりこにある。あはらふこきりこ。按を
るよ。あはらふこきりこ。今物語よ。むえの山よ。はよ住る僧れこきりこ。
小法師の有るが。坊の前小栢の木もろろ。切くたうんこきりこ。
のきれをわらこきりこ。ける中こきりこ。に。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。
あやこきりこ。と。あひこきりこ。坊主に見せこきりこ。ろろこきりこ。南無阿弥陀佛と云
文字こきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。ろろこきりこ。
養房といふ山寺法師。前栽よ栢の木を植る。年来愛こきりこ。
他界の後。弟子の僧。此木を切る湯水こきりこ。とてわりて見らこきりこ。
文字の勢二寸ばかりこきりこ。蓮養房と文字あり。黒木のぬこきりこ。

木此中より色どもく同種よてあり。谷響集云。客云。拆
 木中有文字。嘗於勸脩寺八幡神祠親見矣。或謂多是柿木也。
 夢溪筆談云。木中有文字。多是柿木。治平初。杭州南新縣民家。
 拆柿木。中有上天大國四字。予親見之。書法類顏真卿。名臣
 言行錄後集云。澧州進柿木。成文有太平字。公言。今四海騷然。
 味見太平之象。請不宣示於外。公ハ歐陽修なり。輿地碑
 目ハ富弼トす。ハ誤多ク弘治八閩通
 志拾遺云。宣和五年。春。順昌縣交溪廖懋。以奉議大夫家居。役
 夫解柿木為薪。木中有文曰。聖元天何四字。字體製端楷。墨色
 瑩然。エイ春渚紀聞云。晉江尤氏。其鄰朱氏圃中。有柿木。高出屋
 上。一夕雷震。中裂。木身亦若以濃墨書尤家二字。連屬而上。不
 知其數。至於木枝細者。破視亦隨枝之大小成字。談撰云。柿

木中間多有文。物理小識云。柿木畫皮生文。なと見えしる
 をやいれつらん。又いと近きハ友なる本間眠雲游清ガ鶴鴉集
 云。文化十一年甲戌の春。伊豫國大洲領宇和川村より。く
 といふ交あり。畑中に大なる柿木あり。作物の障ふたれた。
 畑主其柿木を伐く。本の所を芥よて二ツに割たる。文字あ
 り。太王左月右旁ハ不分
 明のよ文字ハ濃藍の色あり。墨をて縁を双鉤
 し。つら如し云とあり。又按をると。柿ありぬ他の木も書画
 ありし。和漢の書にゆかり。

新婦綿帽子 十五

今世婚禮云。新婦の綿帽子といふもの。はうきよりうらもる也。
 伊勢貞陸のよめむらりといふ。よめむらりといふ。よめむらりの

云。うきあちたりとの。是もさいさひびびり。うねたり。あはれ
てい。女鏡秘傳書に婚禮其日の衣装の事。下に白き袴。其
上よ色の小袖。其上よ又白小袖を着る。ひさきをあし。出
る。也。とあり。と。乃の婚禮もあつさ。似る物あり。
尚湖樵書二編云。近時娶婦。新婦。以帕或綾紗蒙其首。其禮不
知。起于何年。按通典杜佑議曰。婚姻。王化人倫之本。拜時之婦。
禮經不載。自東漢魏晉及于東晉。咸有此事。按其儀。或時屬艱
虞。歲遇良吉。急于嫁娶。為此制。以紗縠蒙女氏之首。而夫氏發
之。因拜舅姑。便成婦。由是觀之。蒙首之法。其傳已久。但古為失
時。急娶。不備禮者。而然。而今遂為通行耳。方以智通雅云。儀
禮士昏禮。加景。注。景之制。如明衣。加之。以行道。御塵。智謂非禦

塵。以為蔽也。北齊納后禮。有所謂加幪。去幪。即此字。今俗親迎
羈其首。曰蓋頭。詩綱。衣一作縵。衣。景衣。加幪亦尚綱之遺。
儀禮節略云。呂東萊婚禮。壻婦交拜後。舉蒙頭。遂就坐。按內
則。女子出門。必擁閉其面。蒙頭。即擁面也。俗謂之蓋頭。以錦為
方帕。橫直四尺。女辭。父母拜畢。即以帕蓋頭。升車。至夫家。交拜
必。姆為去帕。乃合卺。此俗之近。理可從者。あといえり。

蜜柑盃 十六

蜜柑の皮を盃となし。戯と。小兒のするわざ也。あちり。あち
大人乃橙盃あり。金章宗擘橙為軟金盃。詞云。風流紫府郎。痛
飲烏紗岸。柔軟九回腸。冷怯玻璃盃。纖纖白玉葱。分破黃金彈。
借得洞庭春。飛上桃花面。歸潛志 元の耶律楚材贈蒲察元帥五首

第三、輕分茶浪飛香雪。旋擘橙杯破軟金。元詩選 劉因賦孫仲

誠席上四杯。うちよ橙の詩あり。瀟湘千樹暮林平。風露詩腸

快。一傾蜜戀金絲。仍可意香分。綠蟻最関情。洞庭春色元無恙。

南國幽姿謾濁清。誰辨酒缸千萬斛。棹歌和月捲江聲。靜修集 明の

瞿佑橙杯の詩。二分半殼洞庭秋。香霧霏霏勝玉甌。左手持

鰲增醞藉。東籬賞菊。賸風流。胸吞雲夢。言非誑。曲奏吳鹽。味頗

投寄語。黃甘并陸吉。較勲輸我醉。鄉侯。詠物新題詩集 朝鮮も亦此事

あり。橙は非は橘なり。彼國人の著。太平閑話云。上舍

吳涉之嘗過一縣。佳賓咸集。紅妓滿座。吳生後至。居客之末。舉

止羞溢。主人擘橘作盃。盃行到吳。飲訖并喫。一座喧嘩。有上舍

宋克明。鼻醜。學中號曰宋橘。上舍金處禮作橘賦。曰洞庭之橘。

按字書
無醜字
意賦賦
俗字而

酸作醜
恐朝鮮
國俗字
陸績事
出吳志
本傳

天作之橘也。克明之橘。人作之橘也。陸績不能為母。而懷歸陟

之安。能飲酒而并吞。とあり。まゝ惡少年。蜜柑の皮をむきて

辦の多少。みく賭とする。鬪柑の類なり。廣東新語。廣州兒

童有賭。蔗鬪。柑之戲。蔗以刀自尾至首。破之不偏。一黍又一破

直至蔗首者。為勝。柑以核多為勝。まゝ核柿とて。核の數をお

て。勝負をちる。是も清異錄。吳越稱雪上瓜。錢氏子弟。逃暑

取一瓜。各言子之的數。言定。剖觀負者。張宴謂之瓜戰。南畝莠言瓜戰の

組を引く。五雜。なと云へり。

覆面 十七

真俗交談記云。二間御鏡。嵯峨天皇御記云。每月朔朝。御代鏡

奉拭之。伯督所役也。著淨衣。用覆面。細細要記云。貞治四年

八月十二日神木御歸座云神官等覆面本社ノ御柵五所ノ御正躰ヲ捧奉ル神業日記太平記亦同今川大双紙云尊主の前乃加用さし始をりと一人ありいふも衣装を改めあく冬人をさす

豫章記云贄殿御臺盛者覆面ヲ垂テ水火ヲ淨ケルト申傳タリ按とるよ真俗佛事編云覆面瞿醜經下云持誦新帛繫其面門是覆面ノ本説ナリ又餘軌六名淨帛又とるこゝあると天祿識餘云元仁宗宴群臣於長春殿供事内臣進饌有咳病帝惡其不潔命為疊金羅半面圍之許露兩眼下垂至胸自是進饌者以此為例通雅衣云屏息奉獻以掩鼻者遼園曰太常供奉祭品如羹醢之類其奉獻人口鼻用物作長袋繫頸後俗名抵鬚非也志名曰屏息太廟以黃羅他祀以紅紵絹為之

とんえとり但覆字おほいとよむめハフウの音あるを誤來とり太平記音義よもフクメンとあり

春畫十八

武家俗説辨鎧色談附録あり春畫を具足櫃いれをり乃論あり慎言若くりいふと衣櫃のうちよもいまをのあり也但これいもりこゝあもするわぎ也青藤山人路史云有士人藏書甚多每置必置春画一冊人問之曰聚書多惹火此物能厭火災也世傳藏書家皆然此恐假言以掩醜耶物理小識云春宮圖謂之籠底書い之辟靈乃厭之也春宮圖枕繪あり通俗編云春画云亦謂之春宮たとどんえとり海多ひ也此物を厭勝とあらも古きり也戒菴老人漫筆云青州城北豊山下麥地古塚得厚蛤壳每壳

中各色畫樹木人物率保形男女交感橫斜俯仰上下異態不可具言正類今之春畫沈辯之得百枚回或是北朝時魘鎮物為近猶園云關洛周齊間有人畊田常掘出古磁器栝椽錠柎之屬千形萬變並是綵繪男女祕戲之狀耆老相傳是五胡亂華時元魏北齊懼其地有王氣瘞此為厭勝之具也又菽園雜記云成化間漕河築隄一石中斷中有二人作男女交媾狀長僅三寸許手足肢體皆分明若彫刻而成者高郵衛某指揮得之以獻平江伯陳公銳銳以為珍藏焉此等事雖善格物者莫能究其所以也

矢立墨筆 十九

類聚名物考調度部 卷十今の世硯れるる小持ある物を矢立と

い昔ハ箆の中少も入入るるなさいいももりり又ありり今有物ハ其さぬぬ胡こ箆への形は似にてる也也俗小土俵空穂といい物ハ物似にてる也也字をはらぬぬ矢を立たすす似にてる名をづくるる太平記俊基被誅事硯ヤアルトノタマハババ矢立ヲ御前ニ指置バ硯ノ中ナル小刀ニテ云同記高氏願書事匹壇妙玄鎧ノ引合ヨリ矢立ノ硯取出シテとあり按する小是より先に源平盛衰記新八幡願書事云覺明馬ヨリ下木曾ガ前ニ跪テ箆ノ中ヨリ矢立取出シ墨和筆捺疊紙ヲ押開テ古物ヲ寫ガ如ク案ニモ及バス書之とあるを見れた矢立といふのハ箆の中にあるを見えるいふを同記是よりさりて師高流宣事小時忠卿大講堂ノ庭ニ進出テ懷中ヨリ矢立墨筆取

出テ所司ヲ招硯ニ水入疊紙二筆書テゾ給タリケルとあり。これと公卿の懐中にあるをも矢立ともなり。僧頓阿の續草庵集。辛以花見付時。やとらよ入く。るひ出る小徑て歌を傳る旅硯を。將軍家ニ参らせしつと紙小一冊ひひ出て表と見よ七十の表をうさ福の花のちどり代と見えくは矢立のたごひとら異なるものや。唐土の書よハ。文房肆攷圖說云。鐵硯。歐陽文忠公稱其製作頗精。然患其不發墨。往往函端石於其中。人亦罕有。唯研筒便於提携。官曹往往持之。以自從爾。今之硯筒皆以牛角爲矣。嶺外代答器用云。交人以墨與角硯。鴉筆併垂腰間。趙翼が甌北集の扈從途次雜詠の題。銅硯。注。狀如方匣。以絮漬墨汁。實之。可以蘸筆。以其便於攜帶也。ふ

とあるを皆矢立の類あるべし。近年皇朝の文人此物を記して墨斗と云。按ずると和名抄工匠具。漢語抄を引き。名物六帖。升菴集。及ひ郷談正俗を引く。匠人の墨斗をスミツボと譯し。矢立といふはるるや。されども清の魏際瑞墨斗銘。墨斗者平池硯也。刻其腹。多受墨。銘曰。庶乎窶空。其默足以容。魏伯子文集とあり。是ハ硯のや。は色バスキツボのみを限らざらや。

朝あけ

七玉集。家良山のはもくすむと見ゆる朝あけ。やがてありぬる表ものや。按とらふ朝あけの海をあらきをいふ。今ハ朝あけあり。あれは乃やのぞく開ゆるハ。哥合根合あどのたごひ也。又新撰六帖。衣笠内大臣。山のはふほてりせる表とむろの浦よあ

按素問
六元正
紀大論
此二論
句

はち日よりとある船人ともみ多るハ夕あけもやされおあけ
いふ夕あけの日よりとあるくよ更けの諺あるべし唐國よ
ても范成大石湖居士詩集の題も曉發飛鳥晨霞滿天少頃
大雨吳諺云朝霞不出門暮霞行千里驗之信然升菴集も
素問云霞擁朝陽雲奔雨府楚辭云紅蜺紛其朝霞夕淫淫而
淋雨唐詩云朝霞晴作雨俗諺云朝霞不出市升菴外集も
儲光羲詩落日燒霧明農夫知雨止耿緯詩向月微月在報雨
早霞生此即諺所謂朝霞不出市暮霞走千里也まゝのち夕
夕やけともいへくや友人西島蘭溪長孫が坤齋日抄も唐俗
亦有朝燒晚燒之語司空曙詩晚燒平蕪外朝陽疊浪東又李
獻吉晚燒吟云早燒不出門晚燒行千里楊用脩詩丹林初曉

清霜重紫谷斜陽赤燒微とあり又上も引る衣笠大臣の内奇
山のまよほてりせむ秋とよまをひし夕あけもよあけ
ぬまやまは田家五行も日没返照主晴俗名日返場と是
あるべし

一錢切

安齋翁の二上峯も房總志料云望陀郡真里谷村も天寧山
真如寺ト云上總曹洞派總録ノ寺アリ門前ニ禁榜アリ條
目ノ文ニ門前百姓於非法有之者可爲一錢切ト按ニ一錢
切詳ナラス清政記ヲ考ニ太閤清政ニ賜リニ高麗陣中ノ
制札ニ軍勢於味方地亂妨狼藉輩可爲一錢切トアリ戰國
ノ頃アマ子キ詞ト猶亦可考按ニ一錢切ト云ハ犯人ニ過料錢

ヲ出サシムル事ナラン。切ノ字ハ限リナルヘシ。犯人ノ貯持タル錢有限リ取上ル。譬ハ僅ニ一錢持タリ氏。其一錢限リ不殘取上ルヲ云ナルヘシ。といへり。按さるる。讀史餘論。此人臣豊太周の軍法ニヨリテ。一錢切ト云事ヲ始メラル。タトハ一錢ヲ盜メルニモ死刑ニアツト又えらるるを以て。漢土もその例おほし。隋書刑法志。高祖開皇十七年。盜一錢已上者皆棄市。通鑑後梁紀。貞明元年六月。以沁州刺史李存進爲天雄都巡按使。有訛言。搖衆及強取人。一錢已上者。存進皆梟首磔尸於市。大金國志太宗紀。粘罕禁竊盜。及一錢者罪死。此高慶裔勸以重刑止盜也。爲盜者知劫竊均于一死。故竊盜息而劫盜盛。歸潛志。金天興二年正月。崔立曰。禁諸軍

漢書高祖紀注
市人取
刑與放
棄之

士取民一錢處死。平鶴林玉露。張乖崖爲崇陽令。一吏自庫中出。視其鬢傍。巾下有一錢。詰之。乃庫中錢也。乖崖命杖之。吏勃然曰。一錢何足道。乃杖我耶。爾能杖我。不能斬我也。乖崖援筆判云。一日一錢。千日一千。繩鋸木斷。水滴石穿。自杖劔下。塔斬其首。申臺府。自劾。崇陽人至今傳之。蓋自五代以來。軍卒凌將帥。胥吏凌長官。餘風至此。時猶未盡除。乖崖此舉。非爲一錢而設。其意深矣。其事偉矣。あどあり。まゝ太平記高家列小義貞青麥事西國の打手を承て。播磨に下着し。あめ。兵多し。糧乏。若軍は法を重んじた。諸卒乃狼藉絶へ。一粒をも刈民屋の一をも追捕した。んごる者をば。速可被誅。之由を。大札に書て。道のけり。あど被多る。とあるをも考ふべし。是も魏志武帝紀

注。曹瞞傳曰。常出軍行。經麥中。令士卒無敗麥。犯者死。遼史拾遺本紀四太宗下。宣府鎮志曰。會同六年契丹主將有事於征伐。徵山後諸州兵。因下令曰。兵行有傷禾稼。損租賦者。以軍法論。名臣言行錄前集。狄青條。軍人有奪逆旅菜一把者。斬之。以狗於。是一軍肅然。無敢出聲氣。續宋編年資治通鑑。高宗紹興十一年。韓世忠曰。岳飛忠孝出于天性。行師秋毫無犯。有取民一縷。按。宋史岳飛傳。民麻一縷。一作。民麻一縷。一作。以束芻者。立命斬之。など。又。亦似ある事あり。

紙燭かをまりの歌

梅窓筆記云。當時ノ戯ニ火廻ト云フアリ。昔ハ脂燭ノ詩ト云フアリ。玉海。壽永二年正月廿五日。召中將於前。脂燭詩兩度令

作一度二寸開山花未遍春一度五寸竹間鶯語滑声又續世繼はるの哥をまのまを

まひ。あさゆへにぬらふ人ふか。うまませ。あそくの歌かあまうらうち。むぎきのうちよ。あななどさへおほせられてトアリ。

以上按する。續世繼。哥このまをまひ。とあるを。崇徳院の

ほりあり。その時のあ。今の傳らぬや。こまよ。更後なり。志

そくの歌ハ。雅經卿の明日香井集云。紙燭一寸。そを讀むるあは

らち。月前菊花を引つらるるを。あう。せば。月影ふほぐひやせ

ま。白雲は。又かまほりの哥ハ。是より。あきよ。俊頼朝臣の散

木集云。堀河院の時。二百。そを。あまうらうち。あう。あう。

なでこのをさしてあしらひまゝ。あつらひのわざになくも也。
南史^{二十}王泰傳云。每預朝宴。刻燭賦詩。文不加點。帝深賞歎。
又^九王僧孺傳云。竟陵王子良嘗夜集學士。刻燭為詩。四韻者。
刻一寸。以此為率。文琰曰。頓燒一寸燭。而成四韻詩。何難之有。
乃與令措江洪等共打銅鉢立韻。響滅則詩成。皆可觀覽。又
劉孝綽賦詠得照綦燭。刻五分。成詩。玉臺新詠。又云。

紙馬 廿三

秉穗錄云。南郭詩。雕梁挿紙馬。中有莫愁名。と紙馬ハ繪馬
などのやふ間也。物とて紙馬と紙錢あり。誤用するふ似たり。
按るに。南郭遺契云。紙馬博異志。王昌齡至馬當山。謁廟。乃
命使賚酒脯紙馬。獻于大王。丹鉛錄。吳太伯祠在閭門之東岸。

吳太伯祠出太平

廣記二百八十二

春秋市人多圖善馬。綵輿美女。以獻之。今按。邦俗懸挿神祠。梁
間者。可以相證。こと詩語の出處なり。唐土の紙馬ハ焚ものか
とばらば今の紙馬にあてたる。南郭の誤あり。さて紙るる
紙錢なるを。ハ正字通。楮錢。古者祭祀用。牲幣。秦俗牲用馬。
淫祀浸繁。始用馬。唐玄宗瀆于鬼神。王璵鑿楮為錢。以代幣。
今俗謂祀鬼神之錢為紙馬是也。とあるによれる。考ふる。小
清朝の俗語。楮錢を紙馬といふと。南郭の詩を難くするも
亦誤あり。紙錢と紙馬と。二種のものとれる。其証を。松窓百説
云。鑿楮象錢印。繪車馬而焚之。六書故^{楮字注}云。凡禱祠必用紙
錢。加以畫馬。鄭氏規範云。凡遇忌辰。孝子當用素衣。致祭
不作佛事。象錢寓馬。亦併絶之。西湖志餘^{術技名家}云。楮錢甲馬焚。

爐中。猶園云。迎賽社公。紙馬上挂紙錢數千。淨慈要語云。燒錢化馬祭禱妖鬼。蚓菴瑣語云。世俗祭祀必焚紙錢甲馬雲鶴。云紙錢衣帛可作冥資。畫馬鶴龍可供騎御。あどあるを

挾將碁 飛將碁 廿四

宋本太平御覽七百五十五藝經曰。夾食者二人。黃黑各十七碁。橫列於前第四道上。甲乙迭推二棋。夾一為食。棋不得食。兩不得邊。食不由道。則不行。棋入夾不取。食一棋為籌。賭多少。隨人所制。これハあるの挾將碁ある。金川瑣記。夷俗奕棋有二種。一板帶肩。二人對下。枰内二十四位。人各十二枚。子先盡者為輸。こども似る戲。酉陽雜俎續集。小戲中。於奕局一

枰。各布五子。角遲速。名感融。予因讀坐右方。謂之感戎。言鯖。夢溪筆談。感融。漢書謂之格五。止用五碁。共行一道。亦有能。否。徐德中善移。遂至無敵。其法已常。欲有餘裕。而致敵人于險。雖知其術。止如是。然卒莫能勝之。今之兒童。以黑白碁各五。共行中道。一移一步。遇敵則跳越。以先抵敵境者為勝。疑即格五歟。五雜組。委巷兒戲。則有行棋。或五或七。直行。道先至者勝。此古感融製也。書隱叢說。格五之戲。止用五碁。共行一道。謂之行碁。相塞其法。已不傳。或云。即今跳虎。此下以黑白碁各五より。為勝。小同。さあ省く。是即格五之遺。未知然否。跳虎古名感融。小知錄。夾碁取一道。人行五子。名感融。融戎也。黃帝感鞠戎旅之間。戲也。漢書謂之格五。今名豁馬跳。などあり。その飛將碁

山女 山姫 廿五

桑葉俗字山本
草和名
及玉篇
佩解

今昔物語談集卷五第十三語猿ハ木ニ登テ栗柿梨子棗柑子橘栢捺郁
 子山女等ヲ取テ持來リ云。俊頼朝臣の散木集連歌山
 女をんぐ仲實云これ山いの女をいひる。つゞけおきれを
 やらむとおのふ。三口中傳の調膳様事の條下に山女晴菓
 子不見内ノ事歟食時ニ皮切弃羞之不惡但稱似虫不切人
 在之此一條ハ大江章雄
ガ書ておとせ按するふこれらの山女をアケビとよむべし其證
 ハ新撰字鏡ニ蘭開音山女也阿介比。伊呂波字類抄山女
俗用下學集草木通草又云山女。類集文字抄草部山女通草子
 藻塩草ニ山女まををがほま本よあけひさうとてふれば
 かへる大原の里などあるを知らるべし又按するは行宗卿の源大

府集ニ琳賢ガととよりいづ栗あけびあるとつうしていづ栗ハ
 心よりくぞあなるこの山姫れあるを返して栗ハ君
 がらちにあらひてや此山姫の志むふあらんとある山姫も
 詞よよるふ亦あけびなり又おききなハトコロ辭なり和名鈔ニ
 辭和名土古呂漢語鈔用野老トコロとんそり野老を野のおきれ
 といふハ海老をうそおきまといひる小同。海老ハ鰻なり海老の二字
抄等ニありうのおきるともなり又按するふ野の字羽をぞやらんとおひるら
 古本能宣集統詞花集あり。やうんとおひるら
 やうんとおひるらの誤あるべし辭ハ多く焼てふひ物也。和名抄ニ崔鶴錫
甘無毒焼蒸充根。空穂物語俊蔭卷にありわらわいてきぬまのいもごころやきてうととらてうせ
 ぬ。實方朝臣集ニ世中の家のおおやくをー比とををのをおこせてげまはめつらげあきかひとこ
 ろつとあきんいん
 見るらんをををそれを老人を茶毘カヒとるりふうけてよみあり。

附識ハ越中國にてあけびを山をんふといふを加賀の大島

氏又聞く記しをうりて其筆記の焼けしを太田全
齋方よかへりたれた余もきけるやふ著述の諺因は記せ
りとして抄録して贈り其書云賀藩大嶋維直曰越中國
新川郡はあけびと云る二村あり一明日と云き一山女
と云り何れはあけびは山女の字を充てらるるを云ふ
一ふ後出羽の佐竹侯の領をさる一店は歌ふ主翁や
まをんかをまわると云り其物を見ればあけびなり
是より凝滞釋然たりと語たり後古寫本節用集を閲
みて通草アケビ又作山女とあり又後新撰字鏡を閲
みて愚案倭名抄莖垂類玉莖引靈異記云蟻著其開の注
今案是開字也俗云或以此字為男陰以開字為女陰其説

未詳とあり然も巴蘭は此方の字にて義を山女乃陰
取く作りてあふん長頭丸が油の山奥ははわら
らんまのいよんゆるあけびが口あきてとあるもた
べ以上諺因

見しとよみ歌 廿六

建久六年民部卿家歌合廿一番左沙弥性照山花哥搦花
里を免しまでん一程ふるぬるなりぬ志賀の山裁判詞云みる
程よとやいべらむ一の字よと少ことたぐふや慎言愚按
作者のよ免りしまでんといふをよととわへり其證は古
今集よよそくらばらるる世よも似るう搦花とくとん
うぬより大江千里句題和歌は晚歸多是看花回

とやかへりきるまゝ。ちありむをり。まふねをよる。
詞花集。關白前太政大臣牡丹を吟。よりちりはつるまぐ
え。ほどふふのともよそつるまぐり。後拾遺集。赤染衛
門。やういで福をまゝ。ものをささるまぐり。あつては月をこゝり
なごのふのえり。とあるまてあるべし。再按。右の判詞をちり
とむるまて。やいへらん。の字ふくを少とたぐるま。とあり
久んを後のむらう。やうあつてや。上の詞花集のほふ。ちりまじ
まてといふく。ちりはつるとよみまをるを考ふ。あ

斗ノ斗ノ斗ノ

運歩色葉集云。倭國小兒呼魚曰斗。類説云。南朝呼食爲頭。
呼魚爲斗故。慶長板節用集小按。宋の曾慥が編集して

墨莊漫錄
下空一
格今據
留青日
札補注
字

六十卷あり。此文を十三卷。北戸録を載て。南朝呼食爲頭。
以魚爲斗。梁科律。生魚若干斗。と見え。はく。南朝ふくを
宋齊梁陳あつて。江南の都あり。南朝といふ也。食をわさるふ。幾頭といひ。魚をわさるふ。幾斗
といひ也。魚を斗といひ。さるまを。あつて。其証ハ。上件の事を。北
戸録全本。まて。えれを。下巻にありて。云。前朝短書雜説。即有呼
食爲頭。梁元帝謝賜淨饌一頭。云。瑤器自滿。金鼎流味。兼食都蔗。味資石蜜。又謝。資功德食一頭。云。天厨淨饌。菴羅法果。又劉孝威謝賜聖僧餘福果食一頭。云。五杏七桃。靈瓜仙菓。
以魚爲斗。梁科律。生魚若干斗。とある。あつて。知べし。あつて。墨莊漫錄云。吳中魚
市。以斗計。斗。二斤半。松陵唱和皮日休釣侶詩云。一斗霜鱗換濁醪。
注云。吳中買魚論斗。酒即稱斤。其來遠矣。通雅云。吳中市魚以斗計。一為二升。半とある。外ハ斤の誤なり。
これ。さるま。ゆり也。

附識。以。白河燕談。類説云。南朝呼食爲頭。呼魚爲斗。斗。

とあり是と一呼字を衍していよく誤る。

忌穢 廿八

伊勢安齋翁の曰蔭蔓。世俗の説。酒酢醬油味噌醴を造るも。漆物あども。月水此女。或ハ男も。穢ある者の手を觸る造るは。必其物成就せ。食物ハ味變ト。漆物ハ色變ト。快く。予と如此の俗説を信ぜ。奴婢ホ穢を忌むて。其事をなさむ。其造る物快く成就せ。必穢の驗あり。何の如と云る悟り難。是を以て諸事を推さ。穢を必忌むる也。神事ハ穢を忌む。尤なり。云。按する。漆物中。顯昭の散木集注。懐胎の女をば。目き。漆色ををぬ也。見れ

を色のかへる也。とあり。あろ。晋の葛洪が抱朴子篇

云。今之醫家。每合好藥好膏。皆不欲令雞犬小兒婦人見之。若

被諸物犯之。用便無驗。又漆彩者。惡惡目者。見之。皆失美色。按。漆

邀千金方の論服餌篇。及ひ風毒脚氣。門膏篇。亦此説。漆彩のゆかり。又味噌醬油。類。後魏の

賈思勰が齊民要術作醬法門云。術曰。若為妊娠婦人。壞醬者。取白葉

棘子。著甕中。則還好。とあり。又すべて穢を忌む。唐の段成式

が酉陽雜俎廣知篇云。金曾經在丘塚。及為釵釧。澠器。陶隱居謂之。

辱金。不可合練。宋の樂史が太平寰宇記卷百五云。池州貴池縣。

孝娥廟。在縣西北四十里。吳大帝時。孝娥父為鐵冶官。遇穢。鐵

不流。女憂父刑。遂投爐中。鐵乃湧溢流注。入江。娥所躡履。浮出。

于鑪。時人號曰聖姑。遂立廟焉。龐元英が文昌雜錄卷二云。昔有。

相印經陳長文章仲將許允皆傳授此法允初拜鎮北將軍以印不善使更刻之如此者三允曰印雖始成而已被辱問送印者果懷之而墜於廁傳の注に魏略を引て明の方以智物理

小識云鑄劍鑄鐘合煉丹藥皆忌裙釵之厭按此器など又えり

避邪一條引る太平記列異傳参考す

酒筵 廿九

篠の葉杉葉を酒は巾といふと季吟法印の山之井にありと云く酒帚といふ奇異雜談集客僧女成小僧同道して他所ふゆく路次の小家に酒筵あり二人より濁膠をのむと見えたり筵を出せり下學集に掃愁帚酒異名也とあると據るるや唐土の酒店より帚を出せり宋の洪邁が容齋續

筆今都城與郡縣酒務及凡鬻酒之肆皆揭大帘於外以青

白布數幅爲之徵者隨其高卑小大村店或挂瓶瓢標筵杆樓

鑰北行日録に十二月十六日丁酉按乾道五年宿臨洛鎮道傍

數處賣酒皆掘地深濶可三四尺累塊上風以禦寒一瓶貯酒

茗筵爲望石炭數塊以備暖盪水許傳魯智深大開小市稍盡頭

一家挑出箇草帚兒來智深走到那里看時却是箇傍村小酒

店まゝ見籬笆中挑著一箇草筵兒在露天裏清嘉録吳

飲云冬釀名高十月白請看柴帚挂當檐一時佐酒論風味不

愛團臍只愛尖など又えり酒の異名を掃愁筵といふを

東坡集の洞庭春色詩に應呼釣詩釣亦號掃愁帚集注李

後主中酒詩莫言滋味惡一箕掃閑愁とあるを出家と成べし

燕巢 卅

三國塵滴問答云。民間ノ占ニ。紫燕來巢ハ。主ノ家富ヲ益ト云ヘリ。温故要略云。燕巢ツクルハ家ノ嘉瑞ト云傳事。抱朴子云。燕知戊己者。其日巢ヲツクリソムルニヤ。又事林廣記舉燕巢邊書。戊字即燕不來。などいり。されども嘉瑞の證あり。按とる。蟲天志卷八陶隱居曰。燕有二種。紫胸輕小者。是越燕。胸斑黑聲大者。是胡燕。俗呼フ胡燕。爲夏候。其作窠喜長。人言有容一足絹者。令家富。珍珠船卷二俗傳。燕巢人家。巢戸内。向及長過尺者。吉祥也。集賢張公。每歲燕巢。正寢。其長可容足。練戸悉内。向數年。遂登庸焉。湧幢小品三十一繁昌縣治。舊俯大江。後有縹緲臺。形勝極佳。天順初。縣内徙。其址爲豪人所占。後奪歸官。

按湖函引鑑
類碎錄
珠文同珍

又有侵者。萬曆四十年。贖出。建同仁書院。凡有名士出。則院中結一燕巢。古今醫統九十一燕來窠。主家興旺。諺云。燕窠長主吉昌。通俗編卷俚語對句。小鵝只揀旺處。燕子不入愁門。とあり。

鷺足 卅一

運歩色葉集二鷺足サギヤウシ小兒所乘之物。とあり。今も遠江駿河常陸上野豊後とて鷺足サギヤウシといひ。薩摩とて人サギヤウシと相摸。美濃下野陸奥加賀周防とて高足サギヤウシととて竹二本に足踏サギヤウシくとてぎ木をサギヤウシ換サギヤウシ結サギヤウシはサギヤウシ多サギヤウシて。小兒の戯サギヤウシとと糸物サギヤウシあり。京江戸大坂とてハサギヤウシハサギヤウシ馬サギヤウシといサギヤウシひ。他國とてもサギヤウシあり。肥前とてもサギヤウシあり。此物サギヤウシふサギヤウシくサギヤウシよりサギヤウシあり。保元物語為義の罪名に長徳ノ比。花山法皇。紅ノ袴ヲツギノベサセテ奉リ。高アニサレ。築垣ニ御腰ヲ懸サセ給ヒ。ヨナク御遊事アリシヲとあり。半井本保元物語

云花山法皇化モノマ子シテ道ヲ行給前足ト云物ヲ召築垣
 ニ御尻ヲ懸テ紅ノ袴ヲ續集土ニサガル程ナルニ云 按ハサキ足シ
 足ト寫 ありん朝野群載ニ載セラル洛陽田樂記云高足一足云古
 事談云永長元年大田樂事云一足顯雅懸鼓經忠高足宗輔
 教訓抄云庶人三臺此樂相撲節ニアラギト云事ノアリケレ
 近來ハ舞絶了古記云舞出自樂屋時其長甚短漸進臺上時
 其長隨長兼明門懸尻舞了入時如本漸減幼主之時被停止
 了子細者見一條院御記其舞名阿良々木云 按ハサキ足シ
 ありん女房躰云 塔ハ足アリテ
阿良々木ト云舞御覽ニケリ是ハ藥師寺風俗トゾ女姿ニテハジメ
 ハ入ノタケ程ニニヤウク高クナリテ一丈ニ及ケリ案ハ此二條トモ
 帳忌定ノ塔乎阿良々止云續古事談云一條院御時相撲ノ又キテノ日
 アラ木舞ト云舞御覽ニケリ是ハ藥師寺風俗トゾ女姿ニテハジメ
 ハ入ノタケ程ニニヤウク高クナリテ一丈ニ及ケリ案ハ此二條トモ
 高足ナリトモ古寫本

庭訓往來注云田樂入道申樂也至神前踏高足是樂田畠豐
 饒之祈禱也季瓊日録云文正元年閏二月十七日徳阿語
 昔南都御社參九月廿七日春日祭之時著高脚上南大門石階彼
 人皆以爲奇云さて後世より一足をも高足する鷺足といへ
 り足本醒睡笑云豆腐を串にさして焙アゲるをたゞ田樂といへ
 りいふされを田樂の姿下シモより白袴を著其上ニ色あるものを
 打つけ鷺足シより躍る姿豆腐の白き小味噌をぬりこく
 たるも彼舞躰シ似たる故田樂といふや夢庵の歌シたるあり
 をあそむところをぬりぬりシをばいひまよせざるもの田樂凡切豆腐以竹串
貫之傳味噌焼而食之是謂田樂其形似田樂法師乘鷺脚故云元出自南都興福東大二箇寺
 之僧語鷺脚杖壹本其本木横槓以兩手持杖頭槓兩脚踏杖末槓上而行其狀似鷺脚之行故按
 たるも雙木脛シ屬する技漢土にありしよりシ列子說符

篇云宋有蘭子者以技干宋元宋元召而使見其技以雙枝長倍其身屬其蹻並趨並馳弄七劍迭而躍之五劍常在空元君大驚立賜金帛列子口義云雙枝屬於蹻今人所為接脚之戲是也雙枝者雙木也隋書音樂志云舊三朝按宋齊梁齊設長蹻伎通典百四十六升菴外集器用云趨戲按此二字亦雅俗替言通雅等有蹻蹻按此二字亦雅俗蹻起器切緣木行戲列子所謂雙木續足之戲也鞦韆蹻同漢高紀可蹻足待也如淳曰蹻音如今作樂蹻行之蹻按蹻行以雙枝長倍其身並趨並馳是也俗曰躡事物紺珠類云百尺趨音獨趨緣木因樹屋書影云列子云按雙枝屬足即今踞高蹻按此三字亦通雅之戲也高蹻之戲習于著履寸寸而上長倍身矣亦能弄刀劍等品字箋集云俗戲以二木附於足股而行謂之躡

高蹻揚州畫舫錄云置丈許木于足下可以超乘謂之躡高蹻通考雜字清嘉錄漢口叢談云楚俗以木繫足履地行舞作戲名曰高蹻あゝあゝの驚足似あゝあゝ

燕戲 卅二

事物異名錄部云列子有以燕戲干元君者按燕戲即所謂雙枝屬蹻之戲今謂之高趨按小知錄即所謂之三字及ひ之蹻之字李調元童山詩集二十弄譜百詠云燕戲多從大禮陳雙枝續脛走如神莫嗔此輩頗邀賞先得從來捷足人自注云高趨即燕戲とあると題あり按するよ右の三書ハ列子を讀ことゝ委あゝあゝあり上又引列子乃立賜金帛の下又有蘭子又能燕戲者張湛注如今聞之復以干元君元君大怒曰昔有異技干寡人

按列子張注本
伏疑守
今從盧
重元林
希逸二
本補之

者先注謂先僑人技无庸適值寡人有歡心故賜金帛彼必聞此而進復
望吾賞拘而擬戮之經月乃放注此技同而時異則功賞不可預要也此注云技同云
とあるより誤とるあり注の意ハ僑人も燕戯も同一く技
藝ありといふことなり同一わざの技なりといふことあり
されハ燕戯の張注云如今之絶倒投狹者とあり前の以雙木
屬其脛と異ある論系一林氏口義云燕戯者燕飲之間雜
弄之技也と此解非ありといふも僑人の技と異なるを以り
考ふるふ文選張平子西京賦云衝狹燕濯胸突ツギキヤウ銛鋒ツギキヤウ注云薛綜
曰卷葦席以矛挿其中伎兒以身投從中過燕濯以盤水置前
坐其後躡身張手跳前以足偶節踰水復却坐如燕之浴也張
銛曰狹以草爲環挿刀四邊伎人躍入其中胸突刀上如燕之

原本作
不知生
出主今
從群書
拾補改
正
兩家鬼
歌子夜
說原並
出異苑
卷六而
晉武作
晉孝武
王軻作
王軻之
不載之
充爲章
那亦是
太元中
十字

飛濯水也これ燕戯もて張注の絶倒投狹の伎あり平津館
本抱朴子辨問篇云踰鋒投狹とももまこ此技あり

附識云皇朝刻本の列子張注先僑人の上方云校者の批
語云僑人疑技人とあるハ僑ハ技の誤あるの意道藏及び
湖海樓本列子釋文云僑人音喬寄也とあるハ蘭子の張
注云凡人物不知生出者謂之蘭也といふ云據云僑寓の
僑と解せざるあり皆非なり説文に僑高也の義もて雙枝
脛ハ屬する技人を僑人といふ其證云山海經海外西經
云長股之國一曰長脚郭璞注云或曰有喬國今伎家僑人
蓋象此身と見えざる是なりさて喬と僑ハ通する字なり
春秋三傳異文釋云左氏傳文十一年傳獲長狄僑如魯

世家作喬如釋文云。僑本作喬。成二年經。叔孫僑如。漢書五行志。作喬。襄廿二年傳。公孫僑。呂覽下賢注。作喬。隸釋。元賓碑同。後漢陳寵傳。美鄭喬之仁政。案釋詁曰。喬高也。說文云。僑高也。喬高而曲也。漢劉向傳。張子僑。師古注。或作喬。列仙傳。王子喬。漢樊敏碑。作僑。二字同音古通。此書別可齊叢書中收 通典百四十五 晉武太元中。瑯琊王軻家有鬼歌。子夜。殷允為章郡。僑人。庾僧虔家亦有鬼歌。子夜。殷允為章郡。亦是太元中。通鑑晉紀十六 僑人蓋肥。胡三省注。寄寓者曰僑人。とあれとも皆雙枝。蹊小屬。まゝの枝人あま。又案す。此二條皆晉乃時の事あり。列子山海經の注者。張湛。郭璞も亦ともに晉人あり。然も。當時此伎行を。る人。然の。事。平。朝。敵。

義茶亭 卅三

閑田耕筆云。先年金龍道人。祇園林。て。菴を結ひ。茶を施をよ。あ。義茶亭と名づく。義字は。を。る。小。唐山。て。蜜湯を施。て。義蜜湯とい。は。り。答て。出所。及。り。慎言云。義蜜湯の出處。い。は。り。義漿の。む。が。お。ほ。え。あ。り。弘義漿の字。搜神記十一。太平御覽八百六十一。容齋隨筆六。よ。出。り。 され。も。か。こ。を。義茶亭あり。弘治八。閩通誌七十 宮室誌。延平府。將樂縣。義茶亭。洪武十三年。道人張子儀建。先是里人王夢得。偽造楮幣。子儀密得其狀。白于官。夢得伏辜。詔賜子儀白金二百五十兩。并藉夢得家資。悉卑之。子儀以賜金。構亭。入田二百六十畝。俾守者。歲收其租。市茶。以。施。行。旅。と。え。り。ま。と。施茶亭と。い。ふ。清の呂

さる糸りくは前々候一をを何れ何ものやうたいぞと。作
らむれどおのれい餓鬼ありあり。水にうまきる。堪がこくひ
世間又人の煩ひ。たこりん地と申はる。たのれが救ひことふひ
けれと水を求めい。いふもぬぐく。人ふつきて。とまぐ飲ゆふ。急
を中とあひあり。猶あるををちくの人。君よ申はて。は手跡よても
は念珠も。殆りりゆ。身にあれいもの。我ふをうはる。ちゆ
ハ。ましては加持る。いなれば。あうへたふとよ。は。い。い。山よりい
く。水のほ。うゆる。堪忍ふ。てもい。い。たをけさせたり。よ。を。と。申
ゆ。い。い。を。く。る。い。い。珠。よ。ま。ぐ。く。あ。う。は。不。便。有。る。と。と。ま。り。
是より後こそ其心をえりて。は。盥。に。い。う。水。を。入。さ。せ。給。ひ。て。
ありを。い。い。う。あ。う。つ。あ。さ。て。世。小。さ。あ。よ。げ。あ。ま。つ。く。と。ま。の。み。て

従外引 秘要引 千金翼 方棘下 補子改 奇字

ケ。と。あり。此説もろく。い。も。亦。い。る。あり。宋本太平
御覽七百六十六 雜物部繩小述異記曰。武康徐氏。宋太元中。病瘧。連治
不斷。有人告之曰。可作數團飯。出道路。呼傷死人。姓名。云。為。我
斷瘧。今以此團與汝。擲之。徑還。勿反顧也。病者如言。乃呼晉故
車騎將軍沈充。須臾有乘馬導從而至。問汝為何人。而敢名官
家。因縛將去。舉家尋覓。經日。乃於塚側叢棘下得之。繩猶在。時
瘧遂獲痊。元板千金翼方。黃帝曰。瘧鬼十二時。願聞之。岐
伯對曰。寅時發者。獄死鬼所為。治之。以瘧人著窰上。灰火一周。
不令火滅。即差。卯時發者。鞭死鬼所為。治之。用五白衣。燒作灰。
三指撮。著酒中。無酒清水服之。辰時發者。墮木死鬼所為。治之。
令瘧人上木高危處。以棘子塞木根間。即差。巳時發者。燒死鬼

所為治之令瘡人坐師以周匝然火即差午時發者餓死鬼所為治之令瘡人持脂火於田中無人処以火燒脂令香假拾薪去即差未時發者溺死鬼所為治之令瘡人臨發時三渡東流水即差申時發者自刺死鬼所為治之令瘡人欲發時以刀刺塚上便得姓字咒曰若差我與汝拔却即差酉時發者奴婢死鬼所為治之令瘡人確梢上捧上臥莫令人道姓字即差戌時發者自絞死鬼所為治之左索繩繫其手脚腰頭即差亥時發者盜死鬼所為治之以刀子一口箭一隻灰一周刀安瘡人腹上其箭橫著底下即差子時發者寡婦死鬼所為治之令瘡人脫衣東廂牀上臥左手持刀右手持杖打令聲不絕瓦盆盛水著路邊即差丑時發者斬死鬼所為治之令瘡人當戸前臥頭

東向血流頭下即差按醫心方十四卷范汪方を引て鬼名及び治方異なりあどんえり

刀玉 卅六

孝養集云浮世ノ捨ガタキ事只夢幻ノ中ニ劔ヲ玉ニ取ルガ如シ發心集云田樂猿樂ナドノ中ニ刀玉ト云テ危キワザスル者アリ是ヲ見レバ刀六ツヲ三人シテトルム子ト上手ナル者ヲハ中ニタテ前ニ向ヘル者一人ウシロノ方二人各刀三ツヲモチテ前後ヨリ我劣ラジト早く投カクルヲ中ニテ前ヨリナグルヲ取テウシロハ投ヤリ後ヨリナグルヲハ前サマヘナゲヤルスヘテ六ノ刀ヲトカクサバキヤルサマ凡夫ノシワザトモオボヘズ人ツテニキカバ信ズクモアラヌ事ナリ太平記云貞和五年六月十一日抖敷ノ沙門アリケルカ四條橋ヲ度サントテ新座本座ノ田樂ヲ合セ老若ニ分テ

能クラブレゾセサセケル云一ノ觥ハ本座ノ阿古亂拍子ハ新座ノ彦夜又刀玉ハ道一アヤイ笠中門口ノ鼓ヲ鳴ラシ云文安田樂能記云刀玉ハ玉阿今阿兩人勤之其役常之儀ハ壹人也季瓊日録云寛正六年九月廿七日今日春日社御祭禮隨兵田樂一曲一舞中門口刀玉本座新座ヤブサメ三番射之又云文正元年閏二月十六日有田樂曰德阿彌來而轉刀玉其遊戯自在轉物之妙滿座人皆觀之無不奇也十七日德阿來重轉刀玉甚奇也其妙手如流彈丸乎類聚往來云刀玉鬻機高脚扇笠和名抄類雜藝小楊氏漢語抄云弄槍和名保古平利とほも此類よ也此戲前條に引る列子の弄七劍迭而躍之五劍常在空中の林氏口義ふ今人亦有此戲

法苑珠林に西域女戲五人傳弄三刀加至十溪蠻叢笑に藝精者擲刀空中接之名跳雞摸あどあもも同トワごるるへしまごカと玉を弄る續日本後紀云兼和四年七月丙戌天皇御後庭命左近衛府奏音聲令弄玉及刀子朝野群載帥江納言の傀儡子記云男則或□雙劍弄七九僧周信が空華集云柏庭歸京過西宮觀俗所謂劍珠者余以疾不能同行作偈奉贈袖裏摩尼一顆圓靈光夜射九重天若從沙竭宮中過龍女神珠不直錢此技も唐土のありし北堂書鈔百十小劉梁七舉云秦俳趙舞奮袖低仰跳丸躍劍騰虛踏空隋書音樂志小舊三朝設樂二十八設鈴伎二十九設跳劍伎白氏文集新樂府立部伎舞雙劍跳七九あどあもんえんり

附識す徐氏筆精小走竿九劍之戲古已有之至宋齊尤盛何承天詩云
脩標多巧捷九劍亦入神標竿也九劍能縮劍成丸而復伸之也今倭國
有軟刀亦九劍之遺制と有り按するは此說非なり九劍ハ丸と劍な
り文選張平子西京賦モテアソビ跳九劍之揮霍アガリサカサ注ハ張銑曰跳弄也九鈴也
揮霍鈴劍上下貌と有ふて明らるなり正文又引くる北堂書抄以下
も九劍二種の證なり

武字をとりと訓む 卅七
掌中歷云七十二候大雪十一月節武始交トラシテツク曆林間答集云
武始交猶合也 璫囊抄云曆ノ注ニ十一月ノ節ニ入テ武始交
ト書ケルヲバトラシメテツルムトヨム武ト云字ヲトラトヨム是曆道ノ
口傳ニテ頗難讀事ニ申メリ按するは虎を武と書るるを本

孫星衍 校本漢 舊儀皇 后玉璽 云注太 平御覽 皇親部 引虎細 作武細

草和名ニ席杖一名武杖注小諱席故也和名抄ニ虎杖一名武杖 釋日本紀

卷十及禮儀白武通ハ白虎通あり尚書顧命ノ虎臣を漢

書古今ノ龍臣人表ニ作る注ニ師古曰尚書作武臣 太平御覽

九百五周處風土記を引テ犬則飛龍虎子とあるを白氏六帖

八十八小飛龍犬武子犬六百文苑英華十二李舟為崔中丞進白鼠

表ニ白武白鼠皆金行之祥也且獸之大者莫勇於武獸之小

者莫怯於鼠前志有之曰用之則如武不用則如鼠則武之與

鼠其類之極乎按用之之句漢書東方朔傳ニ有之本草和名

ニ諱虎とあるハ唐朝の人國諱を避たるを以る也其事を記

したるハ野客叢書に唐祖諱虎凡言虎率改為武如武貴武

丘武林之類是也と是士名の虎貴地名の虎丘虎林を改め

たるをとり。ち係吳地記。注釋柳宗元集。祖庭事苑。學林。中吳紀聞。雲谷雜紀。四朝聞見錄。方輿勝覽。齊東野語等より。皆瑣囊抄より。前の書あり。後の書ハ舉る小たへ。皇朝もて

も彼土の書をうけて。記し來るなり。
附識を別雅。北史羊祉傳。熊武斯裁。即雄武也。とあるハ誤をみて。熊武ハ熊虎あり。柳宗元ガ詩。熊武負崇牙。童宗說。注釋。唐諱虎字。以武字代。と見え。同ト。北史を修撰せし李延壽も。亦唐人ある故。虎字を避たる也。

梅園日記卷第一終

